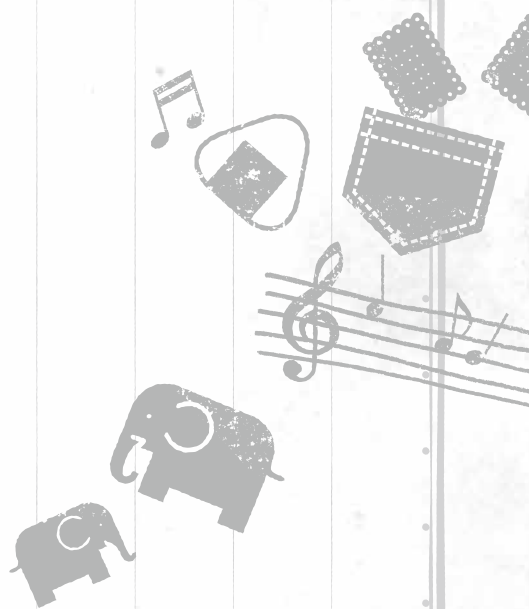




特集

まど・みちおの世界

人間をテーマにした詩から、小さな生き物を見つめた詩、ほこりやおならのことを書いた詩まで、たくさん作品を遺してくれたまど・みちおさん。
今回は、昨年二月に百四歳で亡くなった まど・みちおさんの特集です。
さまざまな方たちから寄せられたエッセイや、まどさんの詩と出会った子どもたちの授業リポートをご紹介します。



まど・みちお
作品の魅力

まどさんのうた 大好き

作家 中川李枝子

作家になるつもりはなくて日本一の保育士を目標とした私は、小さい保育園で十七年間、二歳から就学までの幼児と苦楽を共にした。

幼児は遊びながら育つ。遊びこそ心身の成長の糧、一分一秒おろそかにできない。想像力豊かな子は遊び上手、自分を存分に開放し心身のバランスも安定している。そこで保育とは子どもの持つ生まれた想像力を育てることだと気付いた。絵本、お話、歌が大いに影響する。良質のものを選ぼう！

歌といえば、まど・みちお。私は秘かにまどさんを「子どもの歌の王様」と決めた。まどさんの楽譜は全部持っているつもりだが、特に必需品として愛用したのは二冊。いずれもフレールベル館出版である。「ぞうさん まど・みちお 子どもの歌 100曲集」
「ごはんを もぐもぐ おかあさんと子どものための歌曲集」(磯部俊作曲)
まどさんは自分の作品について前書きで

「ツマラヌ童謡ではない」とはっきり述べている。「ツマラヌ童謡とは曲ではなくモンクの方のことで」と断った上で「ツマラヌ童謡とは、そのモンクが精神の白熱化による所産とはいえない。つまり詩ではない童謡のことです」。

幼児の生活に歌は欠かせない。保育園も幼稚園も歌で始まり歌で終わる。ことばより先に歌を覚えるのは子守唄から始まるのだろうか。ことばのころよさ、リズム感が子どもの全身を引きつける。その線の上に「まど・みちお」大王がいる。

まどさんのモンクは子どもに面白く、はつきりとよくわかる。極上の哲学的ユーモアが二歳の子に通じるのだ。まだ舌の回らない子が「さっきのお手紙 ご用事なかに」とか「なんだか少し淋しい尻尾も一本つけました」とくすくす笑いながら歌う。まどさんに「はしるの だいすき」(佐藤眞作曲)を保育園で毎日元気いっぱい歌ってますと報告したら「土・草・風・足・胸・顔、順々に並べただけで、曲がいいのです」

と謙遜された。

モンクが良いから作曲家も白熱化して素晴らしい曲をつけたと確信する。

私は今も、昔子どもたちと一緒に歌ったまどさんの歌を口ずさんでは名モンクに感心してしまう。

まどさんのうた 思いつくままに。

ぞうさん

おさるが ふねを かきました

やぎさん ゆうびん

はしるの だいすき

ごはんを もぐもぐ

まだまだ たくさんあります。



なかがわ・りえこ

1935年、北海道生まれ。保育士として働きながら執筆活動に入る。「いやいやえん」「子犬のロクがやってきた」「ぐりとぐら」「そらいろのたね」「ももいろのきりん」など著書多数。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。

向日性の極致

児童文学作家 山下明生

まどさんの詩集をひもといてみると、草原に寝ころがって、日向ぼっこしているような、幸せな気持ちになります。

うさぎの子どもはうさぎの子どもで、

うさぎに うまれて／うれしい うさ

ぎ／はねても／はねても／はねても／

はねても／うさぎで なくなりやしな

い (うさぎ)

と、うさぎに生まれた喜びをうたいます。

ぞうの子どもはぞうの子どもで、

ぞうさん／ぞうさん

おはなが ながいのね

そうよ／かあさんも ながいのよ (ぞうさん)

と、生きる幸せを短い言葉に凝縮します。

慈愛の目で命を見つめるまどさんの姿勢は、初期の作品から徹底しています。私はまどさんの、次の作品が大好きです。

あるいてもあるいても日向だったの。

海鳴がしているようだったの。

道の両側から、
山のてっぺんから、
日の丸が見送っていたの。

お船が待ってるような気がして、
足がひとりで急いじやったの。

ホホケタンポポは指の先から、
フルン フルン 飛んでいって

もうお母さまには茎だけしかあげられ
ない

と思ったの。

いそいそいそいそいそ日向だったの。

——ね、お母さま。

僕、あの時生まれて来たんでしよう。

(生まれて来た時)

この詩が発表された一九三七年は、日本が日中戦争という長い戦争に突入する暗い時代でした。そうした世相をつきぬけて、

まどさんの目は、

風も虹もやまびこも／まだ赤んぼう
だったころの／宇宙のふるさとの

(ぬけた歯)

どこかに向けられているのです。

そんな宇宙のどこから、まどさんはお日さまのあたる道があるいてあるいて、百歳まで生きてきました。まさに向日性の極致です。

偶然ですが、一九三七年は、私の生まれた年でもあります。ですから私は、この詩を自分自身への応援歌にしています。心が萎えそうになったとき、繰り返し口ずさんでいるのです。



やました・はるお

1937年、東京都生まれ。児童文学作家。主な作品に『海のしろうま』『まつげの海のひこうせん』『カモメの家』、翻訳に『バーバリヤ』シリーズなどがある。光村図書小学校『国語』3年上巻に、『海をかつとばせ』が掲載されている。

まどさんの二つの詩

詩人・絵本作家

石津ちひろ

私の仕事部屋の本棚には、『まど・みち

お全詩集』の編集者として知られる)伊藤

英治さんが送ってくださった、まど・みち

おさんの写真が置いてあります。写真の中

のまどさんは、いつも穏やかな口調で私に

問いかけてきます。

——自然や物が語りかけてくれるものに、きちんと耳を傾けているか？ 私たちが

「宇宙の意志」に生かされた存在であるこ

とを、忘れてはいないか？ 言葉が自由に

遊びたがっているのを、妨げてはいない

か？……と。

こんなふうに私にとっては、まさしく指標ともいべき存在である、まどさんの作品の中から、二つの詩を選んでご紹介してみたいと思います。

まずは、一つ目の詩から。

ふるふる ふるふる ゆきが ふる

ゆきを みあげて たつ ぼくに

ふるふる ふるふる ゆきが ふる

とつぜん ぼくは のぼってく

せかいじゅうから ただ ひとり
そらへ そらへと のぼってく
ふと きがつくと ゆきが ふる
ゆきを みあげて たつ ぼくに
ふるふる ふるふる ゆきが ふる

(ゆきがふる)

この詩の中で「ぼく」は、自然をまるごと体で受け止め、奥深いところで、宇宙と一体になっています。そんな「ぼく」が感じる、高揚感と孤独感に、魂が揺さぶられてしまうのです。さらには、読み手である私もまた、「ぼく」とともに雪の中を、空の高みへと登っていくことができるのです。続いて二つ目の詩。

みかん みかん

まっかだね

やまで ゆうやけ

みてたでしよ

みかん みかん

この自然への愛情に満ちあふれた、簡潔な詩を声に出して読んでみると、私の心はいつしか故郷である愛媛の、みかん山へと誘われていきます。

目の前には、美しい夕焼け空や輝く星空が広がり、それと同時に、みかんの甘酸っぱい味や香りに五感が満たされ、私はこの上なく、しあわせな気持ちになるのです。



いしづ・ちひろ

1953年、愛媛県生まれ。フランス滞在を経て、詩人、絵本作家、翻訳家への道を歩む。主な作品に『あしたのあたしはあたらしいあたし』『ほんとうのじぶん』『おじいちゃんとのやくそく』『わたしのひみつ』などがある。

微細なもののへの優しい眼差し

作家・評論家 野上 暁

ぼくの中のもどさんは、あの飄々とした風貌とともに、『まど・みちお全詩集』の中から、いまでもしなやかに語りかけ続けてくれる。

まどさんの詩は、『まめつぶうた』のまえがきで自身でも書かれているように、動物や虫や花や石ころ、月や星や太陽や、海や山や風や雨まで、森羅万象をうたいあげ、不思議な遠近感で世界を燦然と輝かせてみせる。幼児でもわかる優しい言葉で、命の素晴らしさをうたう。『まめつぶうた』は、これまで何度読み返しただろうか。読むたびに、清々しい気分浸れて気持ちが安らぐのだ。

全体が五つに分かれているが、最初の「とおい」ところ―生きもののうた」の第一作「やさしい けしき」は、この詩集のテーマとともに、まどさんの自然観や生命観を象徴しているようで味わい深い。

「あちらには 山／こちらには 海／川が 山のたよりをあつめては／マラソンで／海へ おくりとどけ」と始まり、「そし

て なんおくまん年／とうとうある日 生まれでてきました／かずかぎりない 生きものたちが／笑いさざめきながら：／この やさしいけしきを／もつと やさしくするために」と結ばれる。

川がマラソンで山の便りを届けるという表現は、長い道のりをくねくねとたどるイメージが視覚化されていてうきうきする。「もうひとつの目―にんげんのうた」の最初の作品も示唆的だ。

「はたらきとおして／こんなに小さく なった セっけんが／あたしの目には どうしても／セっけんの／おばあさんのようには 見えない／セっけんの／あかちゃんのように 見えて／かわいい」と始まり、ばかな目だなあと思うけど、そう思えるのはもう一つの素晴らしい目が見張つていてくれるからだと続く。

川も石礫も、まどさんによって擬人化され命を吹き込まれる。シニカルな中にユーモアがある。人生がある。

「さんばつは きらいーけしつぶうた」

では、「ケムシ」という題の詩が、「さんばつは きらい」。世界一短い詩と言えそうだが、この一言に含蓄がある。「カマキリ」の「おもちゃの カンガル」も、ゼンマイ仕掛けで跳ねるブリキのおもちゃを思わせる。「カニ」の「なきながらに／わらいながらに」や、「ノミ」の「あらわれる／ゆくえふめいになるために」も、小さな生きものを見る観察眼の鋭さと、眼差しの優しさがユーモラスだ。「まめつぶうた」から「けしつぶうた」まで、縦横無尽に微細な世界を映し出し、そこから宇宙にまで飛翔する。人や物や自然や宇宙に対する、限らない慈しみが心を打つのだ。



のがみ・あきら

1943年、長野県生まれ。作家、評論家。日本ペンクラブ常任理事。「子どもの本」委員会担当。著書に『子ども学 その源流へ』『越境する児童文学』などがある。

子どもと共に在る

信州大学 教授 藤森裕治

ぼくが ここに まど・みちお

ぼくが ここに いるとき

ほかの どんなものも

ぼくに かさなつて

ここに いることは できない

もしも ゾウが ここに いるならば

そのゾウだけ

マメが いるならば

その一つぶの マメだけ

しか ここに いることは できない

ああ このちきゅうの うえでは

こんなに だいに

まもられているのだ

どんなものが どんなどころに

いるときにも

その「いること」こそが

なにもに まして

すばらしいこと として

私が校長を務める信州大学教育学部附属長野小学校では、数年前から「子どもと共に在る学びの創造」をキーワードにした教育研究を進めています。子どもを教え導く管理者としての教師から、子どもと共に学び生きる人間としての教師になって、豊かな学校文化を創造しようという研究です。

いまここにある素材に教師も子どもも共に胸を躍らせ、夢中になって活動し、しばしば失敗し、葛藤し、省察し、そして、学びの歴史を紡いでいく。そういう変化と流動と実在感に満ちた学びを子どもと同じ目線で経験し、意味づけることのできる環境を目指しています。引用したまどさんの詩は、同校の信念を見事に言い表しています。この詩が謳うのは、だれ一人あなだられることも、他のだれかにとつて代わられることもない関係を持ち、そこに「いること」そのものが「なにもに まして すばらしいこと」として、「だいに まもられている」世界です。この詩は、そのような美しい世界が決して特殊なものではなく、「こ

のちきゅう」が持つ摂理そのものだということ

ことを教えてくれています。すべてのいのちがかげがえのない存在として共に在ることこそ、あらゆるいとなみには必要なのだと教えてくれています。

学校という世界で「だいに まもられている」のは子どもたちだけではありません。教師も、同僚や管理職から「だいに」されていなければなりません。学校全体が「ちきゅう」なのです。

校長、教師、職員、保護者、そして子どもたちが共に「いること」。これこそが、最もすばらしい教育環境なのです。



ふじもり・ゆうじ

1960年、長野県生まれ。信州大学教育学部教授。教育学博士。専門は国語科教育学（授業研究）、日本民俗学。著書に『国語科授業研究の深層』『死と豊穡の民俗文化』などがある。光村図書小学校『国語』教科書編集委員。